

生ごみからエネルギーを作り出す「エネカフエ・メタン」を鳴子温泉(宮城県大崎市)にオープンして四カ月になりました。写真。生ごみを持参すると、温泉熱で乾燥させたエノキダケのお茶を飲むことができ、「生ごみがお茶に」がうたい文句です。

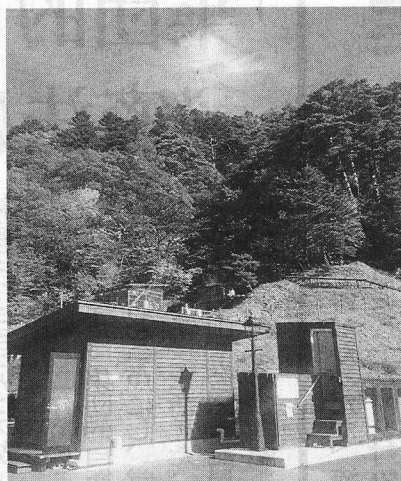
現在、一日十二キの生ごみが地域や観光客の方から集まり、嫌気性微生物によって千二百リのパイオガス(メタン約60%、二酸化炭素約40%)が生産されます。微生物は暖かい所を好むため、微生物タンクを鳴子温泉の廃湯で温めています。温泉地ならではの熱の有

東北大大学院 農学研究科准教授 多田千佳さん



東北復興日記

116



「生ごみエネ」カフェ順調

効活用と言えます。

生ごみは微生物に分解されて液体に。これが液体肥料になり、今年はずっとマトを栽培しました。データでは使えらる分かっていきましたが、実際に育てると本当にトマトが多く実り、おいしか

ったのはうれしかったです。現在、この液肥も希望者に無料配布しています。生ごみと温泉熱を余すところなく使い切り、パイオガスと野菜生産、お茶も飲めるとお得感満載です。日本で古くから暮らし

にあつたもつたいたいという考えは、ケニアのワシントン・マータイさんに「MOTTA INAI」と再認識され、世界共通語になりました。しかし、今の日本は物にあふれ、人との交流はネットを介すなど、古くからの知恵や考えが薄れているようです。ただ、二〇一一年の大震災やさまざまな自然災害が「生きる上で大切な事は何だろうか?」と私たちの暮らしに疑問を投げかけたように思います。

このカフェは災害時、小さなコミュニティの避難所になり、自分たちでエネルギーを作りながら、栽培した野菜を調理して温かいスープを分け合い、生き延びる場にも活用できると考えています。より多くの方にこういったカフェを使っていただけるよう、温泉地だけでなくさまざまな地域に導入してもらおうことが、今の目標です。いつか、このカフェが新しい幸せの形になればと思っています。

この連載は、東京のNPO法人JKSKと、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結結プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。